

私の軍歴

愛知県 坂 鉦位知

昭和十六（一九四一）年十月二十日、教育召集で豊橋第六十二部隊に入隊、一カ月間歩兵の教練を受け、同年十一月二十日、全員豊橋陸軍病院へ行き、二カ月間、衛生兵教育を受けました。翌十七年一月二十日全員、教育召集解除となりました。この間、前年の十二月八日には太平洋戦争が始まり、志願兵応募の通達には同年兵二人が志願しました。

驚いた私は、初年兵教育が済まない最中、無謀だと忠告すると、「俺は静岡の辺鄙な百姓だ、生活が苦しくて兄弟が多いから、面会には来ない。心配するな、御国のためだ、戦死は覚悟の上。健康と幸福を祈る」と言った笑顔の言葉が忘れられず、思い出すと涙が流れます。

三カ月後の四月下旬に、赤紙がきて召集を受け、中

部第二部隊に入隊しました。そして半月後に名古屋出發、満州第四三九六部隊員として鮮満ノ国境の金蒼に駐屯しました。同年八月には、全員が一等兵に進級しました。

十一月中旬、部隊に解散命令がきて、内地へ帰還となる将兵の名などを聞きましたが、それぞれの転属先は公示されず、私は古年兵二人と同年兵十一人で北滿チチハルに転属させられました。

ここでは野戦病院は開設されておらず、野砲部隊の一隅に間借りの生活でした。しかし立派な二階建て兵舎で、前任地と比較にならないほどでした。また豚を飼育中で、部隊の使役に初年兵が交替で従事しました。

街には将校宿舎があり、奥さんが当番兵を呼び寄せ私用に利用します。そして贅沢な生活をしており、当番兵は自慢して語るのですが、私は、これが戦時中の軍隊の生活だろうかと疑問を感じていました。さらに驚くことに、下士官・古年兵の三分の一は何もせず遊んでゐる実状に呆れるほどでした。

翌年四月中旬、病院列車見学に、軍属二人、下士官二人、兵八人の中に私が選ばれ喜びました。五月には全將兵は防疫給水部に転属しました。兵舎は従前通りで、本部・防疫・検水・給水の各班に分けられ、私は防疫班です。

九月末、師団演習に一月有余の猛訓練を実施しました。チチハルから興安嶺へ移動ごとに、夜は天幕生活で、トラック移動で仮眠生活です。師団長は「われ興安嶺を突破せり」と豪語していました。

十二月には外出禁止、翌年一月には私物整理し、二月に留守部隊へ搬送し、部隊解散命令の通達がありました。私は軍医・下士官・古年兵の内地帰還も知らず、非常呼集で起床、軍用ホームに整列し、軍用列車で牛馬同様に密閉されました。用便は山の中腹で済ませる。食事は地元の婦人会からの無言の接待、四日間の旅の集結先は旅順でした。

一月駐屯の旅順では、山の中腹で天幕生活でした。一週間に二日程度の演習に参加しました。これは山の下に在住する満人に対する掩蔽工作か、あるいは

兵に休養を与える場なのか、のんびりと部落を訪れ煙草と果物などと交換する。私は教育者の満人と親しくなり、寛げる楽しさに満足しました。

そのうち天幕撤収、即時出発となりました。大連港に集結し、闇夜の出航で行先は不明、慌ただしさの中に兵は駆け回ります。そして横浜港に到着、しばらくそこに駐留しましたが、何をしているのか不明でした。

結局、小笠原島父島へ到着し、互に上陸演習の名目で上陸する。そして、その都度小休憩する一刻の楽しさがありました。輸送船三隻は出航後、敵機動艦隊に発見され、輸送船は母島に逃避し再度出航しました。

輸送船では、船室から船上へと退避訓練が繰り返されました。「救命具着用！」の非常命令があり、遙か彼方の海上を望みますと、全力疾走する駆逐艦があり、緊張する瞬間でした。駆逐艦の火を吐く砲列、我々兵は身震いする思いでした。

戦友二人病死しました。甲板に整列し海に葬いまし

たが、その時の『水づく屍』の歌を聴きながら黙禱を捧げている一瞬は忘れられない思い出です。翌日船体が大きく揺れる中、行先はパラオ島と発表されました。

四月末日、パラオ上陸。パラオは完膚なきまでに空襲の跡をさらけ出し、残骸を目の前に見て立ち竦みました。上陸作業を敏速に行い、日本人の歓迎、涙を浮かべる女性の姿に興奮を覚えました。小旗を振る住民の接待に応えながら行軍を開始、アルミズ水道を渡り、パラオ本島に昼夜連続の行軍です。仮眠も交替で、道路に防空壕を掘る作業、終了すれば奥地にある大和村に行き駐屯しました。

最初の仕事は家作りでした。木材の伐採運搬、急げ急げと総力をあげての急作業でした。サイパン島は近く、米軍攻撃開始の嵐の前だと猶予も与えられない労働に心身共に疲労しました。慣れない兵、私も含めて作業の辛さが身に沁みました。そしてこの不眠不休の作業の成果は実りました。

七月、サイパン陥落の悲報があり、ニカ所に防空監視所を設置し交替で勤務しました。比島戦への前哨地として連日空襲に晒されました。海軍の航空機がサイパン戦に出動して壊滅され、パラオ本島には飛行機はないと米軍は確認したのでしょうか、頻繁にある空襲に脅える毎日でした。

九月、パラオ群島のアンガウル島とベリリュー島に、米軍は猛烈な艦砲射撃を加えた上で上陸、死闘を繰り返したのですが、嗚呼、悲しくもアンガウル島は十月、ベリリュー島は十一月、全將兵玉砕の悲報にパラオ本島の全將兵は驚愕しました。

第四三九六部隊の戦友、石本・小山・小倉の三人の者がベリリュー島で玉砕したと戦後知りました。合掌。

米軍航空隊の主力は、比島作戦の足掛かりとして、パラオ本島への空襲は熾烈化し、十一月からは連日の空爆に、軍の倉庫も、橋も、停車中のトラックも、完膚なきまでに叩きのめされ、空の魔力に立ち向かう不可能さを思い知らされました。

一月、比島玉砕の悲報に愕然としました。このためパラオは孤立しました。そして極端な食糧不足、水不足で兵は深夜、海水を汲む作業を交替で実施しました。パラオに在任する日本人、沖繩の方が主力ですが、前年の九月から、全員軍属となりました。割当ての芋の供出も月毎に減少し、兵の芋作り作業も盗難が続きました。そのため一週間ごとに兵二人が交替で軍の農地を管理する夜警を設置したのですが、夜間巡視する将校は、下士官を伴に歩きます。ランプの光が遠のき分からなくなると、夜警の兵は芋泥棒に転換する。マッチは貴重なもので、入手方法に苦労しました。

従って予定の食料が乏しくなり、四月から芋の雑炊あるいは小さな芋が三つとなりました。哀れなるかな、芋を掘り起こした跡地に残る小さな芋を見付け、泥を払って食べる兵がいる始末でした。

各部隊から送られる検便には芋の葉が混じります。血便に赤痢の症状が増加し、病死の戦友を見送ることもありました。金蒼当時の村瀬、小林が病死、残るは

私と、見崎、湯山の三人となりました。

終戦までの道程は、生きる屍です。眼はくぼみ、歩行も困難で痛々しく、希望を見失う、哀れさに泣きました。八月十九日、終戦を知った時の安堵感、日本本土に帰還できるのか？との思いがありました。

捕虜となりアメリカ軍に虐待されるか？とデマが飛びました。パラオ島に捕虜となるインドネシア人、台湾の人の暴動が伝えられましたが真実は不明です。

九月から、それまでスコールで浴びる水風呂を返上し、毎日のようにドラム缶の湯風呂が繰り返され、その満足感に、それまで忘れていた笑い声に戻りました。

カツオが豊富に漁獲され、米軍から支給のチーズ・乾パンが一週間ごとに配給され、体力も戻りました。

十月、武装解除終了、海軍の舟艇で、武器を投棄しました。嬉しくて、海の珊瑚の美しさ魅了され、沁みじみと平和に感謝しました。

十一月、すべての日本語を焼却せよと敵命が通達さ

れました。捕虜か？ 行先は？ など流言が乱れ飛び、その焦燥感に戸惑う思いでした。

十二月二十日、バラオ港に集結。厳重な私物検査を終了後、米軍の舟艇に乗船、十日後に日本へ、浦賀に上陸しました。

小学生の子供から、笑顔で歓迎されても、大人達の冷淡な態度、軽蔑した表情に悲しみを強く感じました。

復員業務は敏速に行われましたが、夜までも続きました。「貴方の給料は後で送る、当座の費用に三十円と乾パン、恩給は受給資格は多分あると思うが、復員業務は繁忙です。復員の将兵はまだまだ続く、受給は相当遅れるが期待して待つように」とのこと、嬉しくて職員に再敬礼した私です。

三十一日朝、名古屋駅に到着、中央線・関西線に乗換える兵もいましたが、名古屋駅下車は、私一人だけ吃驚しました。

待合室は浮浪児の群れ、汚れた衣服を見て啞然としました。さらに街の状況は、繁華街の醜い残骸の跡

を、市電から見ても言葉も失いました。幸運にも家も両親も健在で、安堵しました。

会社は戦時中に三社合併で社名変更、食料は配給制と知り驚愕、このような社会情勢の大きな変化にうろろしました。

昭和五十二年、軍人恩給が一時金として支給され、喜びました。しかし数年経過しても連絡は無い。問い合わせ先も分からない時に、知人から軍人恩給失格者の会に入会の勧誘を受けました。年に一回の総会、年に四回パンフレットの送付がありました。軍人恩給失格者に対しての重要な問題の具体性が乏しいと感じました。私は、愛知県庁を訪れ、教えられて軍事援護課へ参りました。私の質問に係員は倉庫から書類を持出し、計算し、「貴方は二カ月不足の失格者です」と。書類を東京へ郵送されるよう説明されました。

平成二（一九九〇）年肺炎で入院、退院した秋、総理大臣から書状・銀盃・時計を受領致しました。

けれども、在満チチハル時代に強制的に兵の給料を天引きし貯金させられたのに、郵政省からは、それは

日本政府は関知しない満州国の貯金です。満州国が消費されたから無効ですと、不可解な理由でした。乏しい軍隊生活の給料の中からの貯金であるのに、と悲嘆の感を覚えています。

戦友会で恩給受給者の喜び溢れる声を聴いても、私は黙視したままです。軍恩失格者の痛憤の声には同情するのですが、私に何ができるのかと思います。戦友は老いて病死する数も増して、戦友会の存在すら危懼する私ですが、私自身も体力の消耗を感じ、妻の愛情に支えられて生活している情けない現状であります。